

令和 6 年 6 月 7 日現在

機関番号：33102

研究種目：若手研究

研究期間：2020～2023

課題番号：20K13666

研究課題名（和文）近代日本における美術制度と都市空間の変容に関する研究：内国勸業博覧会を事例として

研究課題名（英文）A Study on the Transformation of the Art System and Urban Space in Modern Japan:
The Case of National Industrial Exhibitions

研究代表者

逢坂 裕紀子 (Osaka, Yukiko)

国際大学・GLOCOM・研究員（移行）

研究者番号：80864602

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、明治期に開催された内国勸業博覧会が美術工芸関係者の移動と集中に与えた影響を分析し、美術制度の形成と都市空間の変容の関係性を考察した。博覧会関連資料をもとに、美術工芸関係者の住所や関連産業の所在地をデータベース化し、その移動パターンを解析した。また、1939年の米国ニューヨーク博覧会の資料調査を通じて、都市開発とインフラ整備に関する実例を検証した。これにより、博覧会が都市の文化的空間や社会的ネットワークに与えた影響を多角的に分析した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の学術的意義は、明治期日本における内国勸業博覧会が近代日本の美術制度と都市空間の形成に果たした役割を実証的に明らかにした点にある。これにより、美術史や文化社会学の研究に新たな視点を提供し、博覧会という一時的なイベントが長期的な都市計画や文化政策に与える影響を示した。社会的意義としては、公園や公共空間の利用が市民生活やコミュニティ形成、まちづくりに与える影響を理解する一助となり、現代の都市開発や文化政策における参考資料となることが期待される。

研究成果の概要（英文）：This study analyzed the impact of the National Industrial Exhibitions held in the Meiji period on the movement and concentration of people involved in arts and crafts, and examined the relationship between the formation of the art system and the transformation of urban space. A database on the addresses of people involved in arts and crafts and the locations of related industries was constructed based on materials related to the exposition. Based on the information in these databases, I analyzed migration patterns. In addition, through a survey of materials related to the 1939 New York Exposition in the U.S., examples of urban development and infrastructure improvement were verified. In this way, the impact of the exposition on the cultural space and social network of the city was analyzed from multiple perspectives.

研究分野：文化社会学

キーワード：博覧会 都市空間 公園

1. 研究開始当初の背景

現在につながる日本の美術制度は 1867 年のパリ万博への参加にはじまり、内外の博覧会とともに歩んできた。また、博覧会というメディア・イベントは、公園という近代空間に人々を引き寄せ、殖産興業という文脈において欧米からの技術と在来技術が集められ披露される場となった。そして博覧会をひとつの契機としてその周辺地域では人々の社会移動が起こる。

先行研究：佐藤道信は『日本美術 誕生』(講談社、1996)に続く一連の研究で、美術という言葉が 1873 年のウィーン万国博覧会参加の際に翻訳語として初めて使われ、その後国内で開催された内国勸業博覧会を通して美術の概念化と制度化が近代化の文脈においてすすんだことを明らかにした。1877 年に上野で開催された第一回内国勸業博覧会が美術の制度化に端緒を開いたことは美術史研究において強調されることである。また、明治時代の美術に関しては、明治政府の施策による殖産興業のための美術工芸品の進行と美術制教育制度の確立、文化的ナショナル・アイデンティティを確立するための古器旧物保存と博物館を柱として議論がなされてきた。

都市社会学においては、近代都市において継続的に展開される家族集団や職域集団、地域集団の実態を調査分析し、それらを編成し存続させる慣習や組織の論理を明らかにすることが企図されてきた。また、鈴木広らの『コミュニティ・モラルと社会移動の研究』(アカデミア出版界、1978)などを例として、人々の社会移動とその社会的性格との関連は都市社会学における重要なテーマのひとつであった。磯村英一は『都市社会学研究』(有斐閣、1959)などの盛り場研究を経て「第三空間論」を展開し、近代において「第一空間」(家族集団)や「第二集団」(職域集団)を構成する諸制度から解放されて自由に主体性を発揮できる「第三空間」として近代都市空間を位置づけた。吉見俊哉は『都市のドラマツルギー 東京・盛り場の社会史』(弘文堂、1987)で東京の盛り場の形成と変遷を、そこに集まる人々による「上演」という視点で背後にある空間形成戦略と社会構造から読み解き、博覧会もまたひとつの舞台として捉えた。それらの議論のうえで、中筋直哉は「群衆の居場所 近代都市空間の形成と民衆の『都市の体験』」(勁草書房、1996)において、明治期における大通りや公園といった近代的な空間形成に焦点を当て、これらの「群衆の居場所」が国家の厳しい規制のもとに置かれながらも、主体性を発揮せずとも滞在可能な人々に新しい身体経験の可能性を開く場だとした。

このように、博覧会や近代都市空間については、都市社会学的研究と実証的な美術史研究や博物館学研究などにおいて、それぞれ重要な貢献がなされてきた。しかし、都市社会学において、博覧会は一時的に立ち現れる催事空間として位置付けられ、開催場所の公園という近代において初めて現れた空間を抽象的に論じる傾向が強かったのに対し、美術史研究や博物館学においては美術行政の制度史や具体的な資料の集積の観察にもとづく作品・作家研究に限定された事例研究となることが多かった。美術を形成してきた有名無名の作家や職人と彼らを構成する諸制度、および作品制作と生活の場であった都市空間の関係性は十分に研究されてきていない。

2. 研究の目的

本研究は、内国勸業博覧会の開催を契機として美術工芸関係者たちがどのような移動と集中の現象をみせたのか、そして美術と地域に関するいかなる歴史叙述が生産されてきたのかを分析する。それによって近代日本における美術制度の形成と都市空間の変容の関係性を明らかにすることを目的とするものである。

内国勸業博覧会の開催以降、開催地となった各地の公園は文化的空間へと変容していった。それに付随して周辺地域では関係者や関連産業の移動や集中といった現象が発生した。博覧会開催時や後に作成された記録資料や周辺地域で生活・制作活動をしていた個々の作家に関する美術史での調査研究の蓄積と地域に関する歴史叙述の分析を行うことによって、近代日本における美術制度の形成とそれにともなう都市空間の地勢の変化を、取り巻く社会・政治・技術的な文脈に置いて明らかにする。

博覧会という一時的なイベントがもたらした社会的・技術的な影響の考察や公園という空間そのものやそこでの経験の分析にとどまらず、その都市空間に様々な形で関わる人々が空間をどのようにして作り上げたのかを明らかにするという点において、近代における美術制度の形成と都市空間の関係性を考察することは独創的なアプローチといえる。

3. 研究の方法

第 1・4・5 回内国勸業博覧会開催地であった東京を対象とし、美術工芸関係者たちの移動に関する記録、そして美術と地域に関する歴史叙述の分析を行うことで、近代美術制度の形成と都市空間の変容の関係性を分析した。対象とする資料は、明治大正期に刊行された博覧会関係資料や美術家たちの番付、先行研究から美術工芸関係者の住所や関連産業の所在地に関する情報の

テキスト化を行った。

自治体が発行した都道府県史・市町村史や美術関係機関による年史資料、また、作家本人、博覧会・学校関係者、美術団体、地域住民、研究者など、多様な主体によって作成された資料を対象として、美術と地域についての叙述を収集し、分析を行なった。美術工芸関係者が残した随筆や回顧録には、転居とその理由に触れることが少なくない。また、博物館施設等や所在地である公園を活用した地域振興に関する運動や社会的議論を示す公文書や歴史叙述が残されている。これらの資料の内容分析もあわせて実施した。

また、東京での調査のほか、米国ニューヨーク市での現地調査を実施した。ニューヨークは、1853年に米国初の万国博覧会が開かれた場所であり、その後も1939年、1964年に万博開催地となった。1939年開催時のパビリオンは一部現存し現在も美術館として活用されていることから、内国勸業博覧会開催地であった東京・上野公園との比較対象として選定した。ニューヨークにおける博覧会に関する歴史資料は、市内の文書館や図書館に所蔵されていることがインターネットで公開されている目録から伺えたため、これらのMLA(博物館・図書館・文書館)の所蔵資料に関して調査を行った。

4. 研究成果

(1) 美術工芸関係者たちの移動に関する記録のデータベースの作成

明治大正期に刊行された博覧会関係資料や各種歴史資料から主に東京に拠点を置いていた美術工芸関係者を対象として、住所や関連産業の所在地に関する情報1,158件のテキスト化を行い、座標情報とともにデータベース化を行なった。座標情報の析出にあたっては人間文化研究機構が公開しているオープンデータ「歴史地名データ」などを活用したが、番地や号などの詳細までは特定に至らず町レベルでの紐付けとなったデータが8割を超えた。しかし、町レベルでの把握であっても移住の分析には十分であると考え、対象から除外していない。

明治維新以降、幕藩体制において維持されていた絵師や彫金師の社会的ネットワークの解体と再編が指摘されるが、美術工芸者たちの移住の過程は十分に解明されてこなかった。国立文化財機構東京文化財研究所による明治大正期刊行の書画家番付のデータベース上のテキストデータや、『内国勸業博覧会出品目録(第一回～第五回)』(内国勸業博覧会事務局)及び『温知図録:調査研究報告書』(東京国立博物館)、東京藝術大学大学史史料室所蔵資料などを対象として、得られたデータの量的分析をもとに近代化における美術工芸関係者の移動と集中、制度、地域の関係性を検討したところ、幕末から明治時代20年代にかけて美術工芸家たちの移動は多く見られたものの、博覧会開催や美術学校開設との関連性を見出すまでには至らなかった。

(2) ニューヨーク市内アーカイブ機関における博覧会資料の調査

1939年に開催されたニューヨーク博覧会に関する資料はニューヨーク市アーカイブズ、ニューヨーク公共図書館、開催地であったクイーンズのフラッシングメドウ・パークにあるクイーンズ博物館などに収蔵されている。博覧会に関連するどういった資料が、各アーカイブ機関にどの程度所蔵されているかについて調査した。

ニューヨーク市アーカイブでは、博覧会に関連する資料として、フィオレロ・ラガーディア市長とロバート・モーゼスの記録が保管されている。市長の記録には、市による物理的改良、ゲート収入、貧困層への無料チケット、各州および国のパビリオンに関する資料が含まれている。一方、モーゼスに関する膨大な公園部門の資料は、その大部分が博覧会のためのインフラ整備およびその後の公園への転用に関するもので、水路、建設、契約、解体、維持管理等に関する記録などであった。

ニューヨーク公共図書館が所蔵する博覧会のコレクションでは、会場の建物の大判写真や、個人からの寄贈品にはパンフレット、カード、記念品、エフェメラなどの博覧会に関連するメディアや立体物などが含まれていた。

クイーンズ博物館では、博覧会の建築モデルや写真、刊行物などのプロモーション資料、記念品とお土産、エフェメラなどのアイテムが所蔵されており、多くは常設展示を通じて来館者に提供されている。また、同博物館の建築自体が博覧会パビリオンを利用した貴重な歴史的建造物である点にも特徴がある。

ニューヨーク博覧会の開催地フラッシングメドウは、F・スコット・フィッツジェラルドの1922年発表の小説「グレート・ギャツビー」において「灰の谷」として描かれるなど、長い間荒廃した土地と見なされていた。今回の調査では、ニューヨーク博覧会の文化的側面が都市に与えた影響までは資料から明らかにできなかったものの、博覧会を契機としてその土地が都市開発やインフラ整備などの面で整備されたことを裏付ける資料の存在はニューヨーク市アーカイブの所蔵資料から確認できた。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計2件（うち査読付論文 0件/うち国際共著 0件/うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 逢坂裕紀子	4. 巻 第883号
2. 論文標題 不忍池の景観の変遷：下町と山手の境界空間	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 青淵	6. 最初と最後の頁 36-38
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 逢坂裕紀子	4. 巻 5巻, s2号
2. 論文標題 デジタル・アーカイブのメディア論：文化資源をめぐるモラルエコノミー	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 デジタルアーカイブ学会誌	6. 最初と最後の頁 p. s179-s182
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.24506/jsda.5.s2_s179	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件/うち国際学会 0件）

1. 発表者名 逢坂裕紀子
2. 発表標題 東京大学人名データベースの構築と活用 人名による所蔵資料検索システム公開に向けて
3. 学会等名 デジタルアーカイブ学会第7回研究大会一般研究発表
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 逢坂裕紀子
2. 発表標題 デジタル・アーカイブのメディア論：文化資源をめぐるモラルエコノミー
3. 学会等名 デジタルアーカイブ学会
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

しのばず和文化プロジェクト
<https://shinobazu-wa.com>

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------